

日本歴史

【1】古代

[1] 飛鳥時代

推古朝の政治（聖徳太子の新政）

推古天皇の摂政になった聖徳太子は有力豪族をおさえ、氏姓制度の弊害を除いて天皇中心の中央集権国家を確立しようとした。まず、603年には冠位十二階を制定し、門閥世襲を打破し、人材登用をしようとした。604年には官吏としての道徳・心構えを説く為憲法十七条を制定した。外交では607年に小野妹子を隋に派遣して隋との国交を開始した。また、後に大化の改新で活躍する高向玄理・僧旻も留学生・留学僧として隋に渡った。

飛鳥文化

飛鳥文化は日本最初の仏教文化といえる。聖徳太子の法隆寺、四天王寺などの寺院建築、太子による經典注釈書三経義疏などはその表れである。建築では法隆寺金堂・五重塔が有名である。彫刻では、鞍作鳥作といわれる法隆寺金堂釈迦三尊像、長身の美しい法隆寺百済観音像、半跏思惟像である広隆寺彌勒菩薩像、中宮寺彌勒菩薩像、法隆寺夢殿救世観音像などが有名である。工芸では金工である法隆寺玉虫厨子がある。また橘大郎女が、夫である聖徳太子を偲んで作った中宮寺の天寿国繡帳は有名である。

大化の改新

高向玄理、僧旻、南淵請安が唐から帰国し、その新知識が原動力になり、645年、中大兄皇子、中臣鎌足が蘇我蝦夷・入鹿父子を滅ぼした。年号を初めてたてて大化とし、都は難波に移された。646年に改新の詔が出され、戸籍・計帳を作り、各人に口分田が配給された。これを班田收授法という。中大兄皇子は後に天智天皇となり、663年、百済復興への要請に応じて出兵したが、白村江で唐・新羅の連合軍に大敗した。

天武・持統天皇の政治

672年、皇太子大友皇子と皇太弟大海人皇子との皇位継承争いが起こり、後者が勝利した。これを壬申の乱という。大海人皇子は飛鳥浄御原宮で即位